

HOPE Bourgogne

フォントネー修道院

文芸評論家

饗庭 孝男

あえば・たかお
1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。
フランス文学専攻。
著書に「石と光の思想」(勁草書房)、「小林秀雄と
その時代」(文芸春秋)、「恩寵の音楽」(音楽之友社)、
「西欧と愛」(小沢書店)、「幻想の都市—ヨーロッパ
文化の象徴的空間—」(新潮社)、「ヨーロッパの
四季」(東京書籍)など多数。



フォントネー修道院の回廊



フォントネー修道院の窓

フォントネー修道院はデジョンから行くと国道5号をとおり、約80キロで達する。ヴェズレーから行けば、国道457を経てモンパールの町に入り、そこから森の中を15分ほど走って着く。修道院は広い、人家の稀な森の空地に立っている。そこから湧き出す泉はきよらかな小川をつくり、モンパールの方に流れてゆく。

私は早春も、夏のおわりにも、また秋にもここを訪れた。静かなのは春だ。清冽な溪流に従ってゆくと、その空地に光が淡くおちて人気ない広々とした世界に修道院が見えてくる。きこえてくるのは鳥の啼き声と、林をわたってゆく風の音だけだ。

この修道院は1118年、シトー修道会の聖ベルナルドゥスによってたてられ、最盛期には300人以上の修道士、労働修士がいたと言うが、今はその^{ほとん}ぶはない。16世紀から衰退がはじまり、大革命の時には製紙工場となったが、やがて今世紀のはじめに素封家のエドワール・エナールが買いとり、昔のままにほぼ復元した。だから民間のものだが見学はさせてくれる。まわりの枯草の間から空にむかって雲雀がとび立ち、早春の光が雲の間から淡くさして入口に佇む私を泉のほとりへと誘ってゆく。

左手に外来者の宿泊所、彼らのための祈禱所、そしてパン焼の棟がならぶ。そこから奥に向かうと鳩小屋のかたわらをすぎ、教会があらわれてくる。簡素この上もない建築で、ロマネスク教会に多い、幻想動物や聖書の主題にみちた柱頭彫刻は何もない。簡明にして、しかも「清貧」を旨としたシトー修道会の精神のまま。彼らは11世紀末、先だつたクリュニー修道会が次第に土地、財産の寄進をうけて奢侈贅沢となり、典礼の儀式が多く、労働の時間がきわめて少なくなつたのを批判しながら登場したのである。

彼らはクリュニーから80キロ離れたシトーという荒地を切り開き、「清貧」、労働のバランスを回復し、奴隷をもとめず、自給自足の生活にそって厳しく自己を律した。しかもピラミッド形の機構をもつたクリュニー修道会とはことなり、横につながる民主的な運営をこころみた。また当時の12世紀はとくに天候が比較のおちつき、「大開墾時代」といわれる程、森がひらかれたが、シトー修道会もその先頭に立って働いたのである。

彼らは求めて谷の奥、森の中、山に水の便を考えながら修道生活の場をつくった。このフォントネー修道院も豊かな泉をいくつも持った大きな森の奥にある。また芸術的なものを建物からとり去り、「感覚のよここび」をとおしてではなく、直ちに神に達する道をえらんだ。その名のとおりに、12世紀の「霊的」な泉となったのである。「フォントネー」とは「泉に注ぐ人」という意味をもつ。私が目の前にあるこの修道院は、まさしくその理想の具体的なあらわれである。この精神に共鳴して修道士になった人は1153年、聖ベルナルドゥスが亡くなった年、その数343に及ぶ教会、修道院をたてたのである。彼らがとくにあがめたのは聖母マリアで、今も、この教会の内陣近く、13

世紀の聖母マリア像が一つたてられている。

教会はつましく、静謐だ。右に出ると回廊がある。その柱には僅かに淡い植物文様の線がある。早春の光が広くあふれる中庭をめぐるこの回廊をゆっくりと歩く。「単純の偉大さ」という言葉が口をついて出る。

寝室は共同で2階にある。修道士たちは起床(冬)が午前2時、就寝が午後5時。聖務と労働に4、5時間があてられていた。開墾、牧畜、手工業や農機具の改良、発明等がその仕事だった。修道院の敷地の右側に工場があり、中世において「知的労働者」でもあつた彼らは、水力をエネルギーとして多くの実験と改良を重ねた。泉のまわりに魚を飼い、労働修士(下部構造)の助けをかりて羊毛産業にもいそんだという。

火の気は台所にしかなく、彼らは藁ぶとんに衣服のまま休んだ。しかし病めるものための病室や、規則をやぶつた修道士を入れる牢もある。ここに使徒的生活をストアイズムによって地上に実現したいという強くゆるぎない意志のあらわれがある。

私は広いこの修道院のなかをあちこち午後の光を浴びながら歩いた。教会左手の林のなかに小さな墓地がみえる。彼らはここに入り、働き、老い、あるいは病み、やがてこの墓地で永遠の眠りについた。「全ては恩寵である」という言葉が思い出される。

シトー修道会の建物は、なお多くのこっているが、とくにブルゴーニュの他に、私は「プロヴァンスの三姉妹」と呼ばれる、アヴィニヨンの東、50キロのセナンク、エクス、アン、プロヴァンス郊外、デュランス河に近いシルヴァカンヌ、南仏海岸、フレジュスから入る林の間のルトロネの修道院も好きだ。そしてこのフォントネーはまさに「中世の至高の夢」の一つであると見えよう。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか? 数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

問い合わせ先: ㈱佐多商会 ブルゴーニュ事業部
TEL: 03-3586-4558 (東機質ビル内) 担当: 若沢、田中

